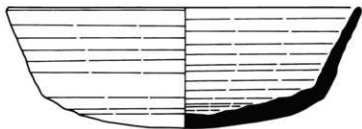


台 渡 里 5

—市道常磐123号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里60次)—



2011

水戸市教育委員会

台 渡 里 5

—市道常磐123号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里60次)—

2011

水戸市教育委員会

ごあいさつ

「台渡里官衙遺跡」は、那須茶臼岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しております。この「台渡里官衙遺跡」の周辺には、古代常陸国那賀郡の郡衙周辺寺院である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や国指定史跡「愛宕山古墳」など多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な文化遺産です。近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に公共下水道工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、古墳時代～奈良・平安時代の集落とみられる堅穴建物数棟が確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史研究はもとより、今後において埋蔵文化財を保護・保存するうえでも貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました周辺住民の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 23 年 1 月

水戸市教育委員会
教育長 鯨 岡 武

例 言

- 1 本書は、水戸市道常磐123号線道路改良工事に伴う台渡里官衙遺跡（第60次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社地域文化財研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
- 3 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所在地	水戸市渡里町2616-1番地外
調査面積	88㎡
調査期間	平成22年4月6日 から 平成22年4月21日
調査主体	水戸市教育委員会（鯨岡 武 教育長）
調査担当者	米川暢敬（文化課埋蔵文化財センター文化財主事）
調査支援	高野浩之（株式会社地域文化財研究所）
調査参加者	海老原龍生・斉藤与志郎・高野正行・中島貞雄・中島トミ子・中村 薫 平林敬子・渡辺由美子・野村浩史・川村理華・大関美穂・増田香里

事務局	内田秀泰 教育次長
	中里誠志郎 文化課長
	五上義隆 文化課長補佐
	萩谷慎一 文化課文化財係長
	渥美賢吾 文化課文化財係文化財主事
	海老澤里江 文化課文化財係主事
	宮崎賢司 文化課埋蔵文化財センター所長
	川口武彦 文化課埋蔵文化財センター主幹
	米川暢敬 文化課埋蔵文化財センター文化財主事
	山戸祐子 文化課埋蔵文化財センター嘱託員
	色川順子 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
	大津郁子 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（9月30日まで）
	田中恭子 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
	金子千秋 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
	三浦健太 文化課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員（10月1日から）

- 4 本書は、米川・高野が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて高野が編集した。
- 5 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後に一括して水戸市教育委員会が保管する。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関よりご教示・ご協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。

茨城県教育庁文化課 文化庁文化財部記念物課 株式会社杉森工業 土生朗治

凡 例

- 1 測量は、国家標準直角座標Ⅳ系に基づく座標値を示し、方位は真北を基準としている。
- 2 各調査区の遺構全体図は1/80、1/100、各遺構の平面図・断面図は1/60、遺物出土状況微細図は1/30である。
- 3 各遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例に倣い、以下の通りとした。
S I…堅穴建物跡 S K…土坑 Pit…ピット P…住居の柱穴 S D…溝
S X…不明遺構 ※攪乱・木根等は「K」を用いた。
- 4 遺構断面図及び基本堆積土層図の標高は、図中に掲載してある。
- 5 遺構の土層中、基本堆積土層に準じるものは土層説明を省略してある。
- 6 遺物実測図の縮尺は、1/3で記載してある。
- 7 遺構・遺物の色調標記は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用している。また、土層説明中の「B」は、ブロック状のものを意味し、小・中・大はブロックの大きさを示している。少・中・多は含有物の面積割合を表し、「多」に付した（ ）内の割合は、5%以上のものについて記した。ブロック状の大きさ及び面積割合は同書土色帖に準じた。
- 8 本文中及び遺物観察表の数値中、〈 〉内数値は推定値を、（ ）内数値は現存値を表している。計測単位は、規模を「cm」、重量を「g」で示した。
- 9 出土遺物一覧表の中で、残存値が1/2以上のものは個体とし、それ以下は破片としてカウントしている。また、接合したものは全体で1点とし、逆に同一個体が明らかではあっても接合しないものはそれぞれを1点としている。
- 10 引用・参考文献は巻末に一括して掲載してある。
- 11 表紙に使用した図は、2区SD-03出土の須恵器坏（第11図-4）である。
- 12 挿図中で使用したスクリーン・トーン及び線種・ドットは以下凡例図の通りである。

凡 例 図

埋設管・攪乱  硬化面 

出土土器 ●（使用） ●（未使用）

目 次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
(1) 調査の方法	3
(2) 調査の経過	3

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本堆積土層	10
第2節 調査区の概要	10
第3節 検出された遺構と遺物	
(1) 1区	11
(2) 2区	13
(3) 3区	15

第Ⅳ章 総括

第1節 土地利用の展開	22
(1) 台渡里官衙遺跡南前原地区の様相	22
(2) 古墳時代から奈良・平安時代の様相について	22
(3) 中世以降	24

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

水戸市埋蔵文化財報告書一覧

表目次

第1表 台渡里遺跡群周辺の遺跡一覧……………8	第3表 出土遺物一覧表……………21
第2表 出土遺物観察表……………20	

図版目次

第1図 台渡里官衙遺跡の位置・範囲及び調査 地点の位置……………2	第10図 2区全体図……………14
第2図 調査区の位置……………2	第11図 2区出土遺物実測図・ SD-03遺物出土状況平面図……………15
第3図 旧渡里村周辺の地形と 調査地点の位置……………4	第12図 3区全体図……………16
第4図 台渡里遺跡群周辺の遺跡分布地図……………6	第13図 3区遺構実測図……………17
第5図 調査区域図……………9	第14図 3区SI-02遺構実測図 及び出土遺物状況図……………18
第6図 基本堆積土層図……………10	第15図 3区出土遺物実測図……………19
第7図 1区全体図……………11	第16図 台渡里官衙遺跡における炭化米検出 地点と旧地形概念図……………23
第8図 1区遺構実測図……………12	
第9図 1区出土遺物実測図……………13	

写真図版目次

写真図版 1 1区全景（北から）/1区土層断面（北西から） SI-01土層断面（南から）/SI-01遺物出土状況（北から） SI-01全景（北から）/Pit-01・02全景（西から） SK-02・Pit-03全景（西から）
写真図版 2 2区全景（東から）/2区全景（西から） SD-02全景（南東から）/SD-03・Pit-04～06（南から） SD-03遺物出土状況（北西から）/SX-01全景（南から）
写真図版 3 3区全景（北東から）/3区全景（南西から） SI-02遺物出土状況（南西から）/SI-02全景（南から） SD-01全景（東から）/SK-06・12全景（南東から）
写真図版 4 出土遺物

第I章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成21年6月10日付生整第196号及び平成21年7月31日付下工第575号にて文化財保護法第94条に基づき、水戸市長から、茨城県教育委員会教育長（以下、「県教委教育長」という）あて、狹隘道路整備および公共下水道工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知について」が水戸市教育委員会（以下、「市教委」という）へ提出された。

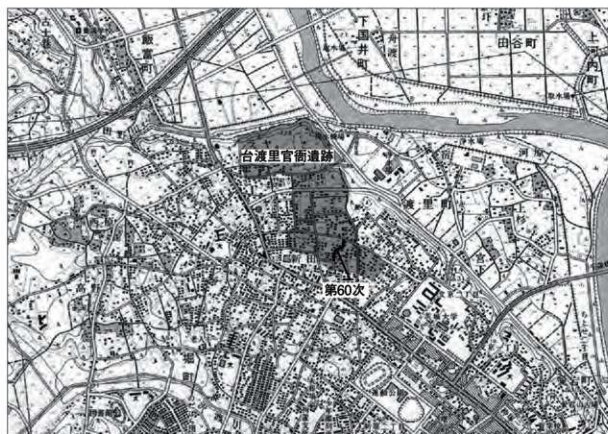
開発予定地である水戸市道常磐123号線（渡里町字南前原2616～2699地先）は周知の埋蔵文化財包蔵地である台渡里遺跡¹⁾の範囲に該当していた。この近隣では、平成17年度に実施した共同住宅建築に伴う調査（第24次）の際に正倉とみられる礎石建物跡や正倉院区画溝、炭化米、「備所」と記録された墨書土器などが出土しており（小川・大淵ほか 2006）、個人住宅建築に伴い平成18年度に実施した試掘調査（第31次）では常磐123号線に向かう東西方向の溝状遺構が確認されていること（川口・色川ほか 2009）、平成18年度～21年度に実施した第32次・第41次・第44次・第51次調査の際には居館もしくは官衙ブロックを区画するとみられる溝跡や正倉とみられる礎石建物跡が確認されていたことから、遺構・遺物が分布する可能性が高いと予測されるエリアであった。遺構・遺物が存在した場合には、道路拡幅工事及び下水道管埋設工事により損壊を受けるため、工事着手前に市教委が発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見書を付して平成21年11月4日付進達した（教文第528号・660号）。

この通知に対し、県教委教育長から平成21年12月4日付文第153号・1532号にて、工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨、勧告があった。

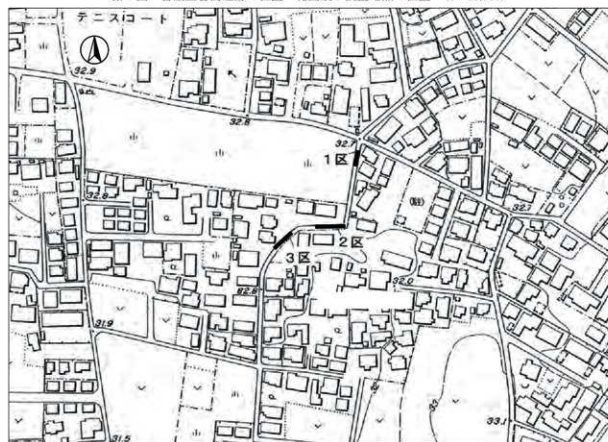
これを受けて市教委は総延長297.1mのうち、沿線に面する住宅の玄関先と駐車場出入口部分等を除いた1区～3区（総計88m）を調査範囲とすることを決定し、平成22年4月6日から記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。発掘調査は市教委文化課の米川暢敬文化財主事を調査担当者とし、株式会社地域文化財研究所の支援を受けて、同社の高野浩之氏を現場代理人として平成22年4月21日まで実施することとなった。（米川）

注

- 1) 調査終了後に遺跡の名称変更及び地区の名称整理を行い（原美・川口 2011）、遺跡名を「台渡里官衙遺跡」に変更した。以下、「台渡里官衙遺跡」の名称を用いる。



第1図 台波里官衙遺跡の位置・範囲及び調査地点の位置 (1:25,000)



第2図 調査区の位置 (1:2,500)

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査区は3箇所を設定し、各調査区の名称は、最も北側を1区、中間を2区、最も南側を3区とした(第2図)。それぞれの調査区は、現状で使用されている市道に設定したもので、調査中の区間は昼夜とも完全に通行止めとなるため、近隣住民の方々に迂回などの協力を得て、調査の遂行が可能となった。

調査は、まず重機による舗装及び表土除去工事作業を行い、完全に工事が終了した段階で発掘調査補助員を投入した。遺構の掘り下げは補助員による人力で全て行い、掘り下げ及び記録作業が全て終了した時点で、再度工事車両を搬入して埋め戻しと道路の仮復旧を行った。いずれの区もこの手順を繰り返して作業を進めた。

発掘調査では、調査区が非常に狭小であるため、遺構のほとんどは調査区外に延びていた。遺構の中には、形状から性格が判断されるものも存在したが、把握できないものも多い。そこで発掘調査中の各遺構の名称は、その後の整理において遺構配置の煩雑化や欠番等による混乱を最小にとどめるため、それぞれの区ごとで通し番号を付し、1区の1号遺構であれば「1-1」といった形で、図面・写真等の記録を行った。基準点は、調査区周辺に6地点(T-1～T-6)の基準ポイントを設定し、座標・水準は基準ポイントの全てに持たせた。平面及び土層断面の実測は、1/20縮尺を基本とし、遺物出土状況の微細図は1/10縮尺を用いた。写真撮影は、35mm判白黒ネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い、調査の過程で随時行った。

整理調査では、発掘調査で検出された遺構を、遺構の性格ごとに名称を変更し、それをもとに遺物の水洗及び注記を行った。注記は、今回の地点名「DWT09-060」後に奈良文化財研究所の用例に倣った遺構略号(凡例参照)で表記した。遺構実測図は、第二原因を作成して修正を加えた。遺物実測は原寸で行い、トレース時に報告書掲載に合わせて縮小した。図面、遺物、写真アルバムは全て台帳を作成し、収納後の活用を備えた。

(2) 調査の経過

調査の準備は、道路使用許可を申請し交付されるまでの3月上旬に、調査区周辺及び周辺域への周知を徹底させるため、該当工区沿線の住民へ調査案内のチラシ配布、工事関係者との打ち合わせ、工事予告等の看板設置のほか、発掘機材搬入等の作業を行った。

発掘調査は、4月5日より開始を予定していたが雨天のため、6日からの開始となった。3区から調査を行い、南から北へ進める工程で行った。7日に基準点・水準点の設置、10日には3区の埋め戻し工事を行った。翌週13日から2区の調査を開始し、16日には埋め戻しに着手した。1区は19日に表土除去を開始。調査面積が少ないこともあって、21日には埋め戻し工事を完了し、現地における発掘調査を終了した。

整理調査は、発掘調査終了後速やかに開始した。洗浄、注記等の基礎的な作業を行った後、遺構図の修正、遺物の選別及び実測、報告書掲載用の遺構・遺物のトレース作業を経て、それらの成果をもとに割付・編集作業を行い、本書の刊行となった。(高野)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本章では台渡里官衙遺跡の地理的環境と歴史的環境について概観する。

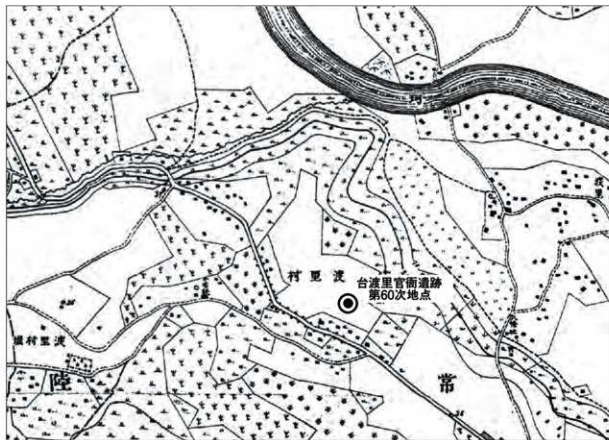
第1節 地理的環境

台渡里官衙遺跡が所在する水戸市渡里地区は、北を那珂川に南を桜川に挟まれた、通称「上市台地」と呼ばれる那珂川によって形成された河岸段丘上に位置しており、南北方向に流れていた那珂川が渡里地区付近で緩やかに東の方向へ蛇行していく場所である（第3図）。渡里という地名がいつ頃まで遡り得るのか定かではないが、渡河点との関係が想定される地名であり、対岸に「舟渡」という地名が遺ることから、近世においても利用されていたようである。直近には「永田河岸」があったとされるが詳細は不明である。上市台地の東側斜面から斜面下にかけては愛宕町滝坂の曝井に代表される湧水点が点在しており、古くから住環境の良い土地であるといえる。低地との比高は約20mである。

（米川）

第2節 歴史的環境

台渡里官衙遺跡の周辺には、多数の古墳時代・奈良・平安時代の遺跡が確認されている（第4図・第1表）。それらのうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、堀遺跡、台渡里廃寺跡、渡里町遺



第3図 旧渡里村周辺の地形と調査地点の位置（1：20,000）

跡、砂川遺跡、白石遺跡である。

アラヤ遺跡 (024) は第1地点の調査の際に4棟の竪穴建物跡と工房跡1棟、掘立柱建物跡2棟、粘土探掘坑2基が確認されている(井上編 1990)。遺構の造営時期は出土している土器から、工房跡が7世紀末～8世紀初頭、竪穴建物跡は8世紀～9世紀、掘立柱建物跡は竪穴建物跡との重複関係から9世紀以降とみられる。工房跡や竪穴建物跡からは刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に係わる集落が展開していた可能性が高い。その後、官衙に関連する可能性がある掘立柱建物跡がこの地に展開していることから、土地利用が変化した状況がうかがえる。

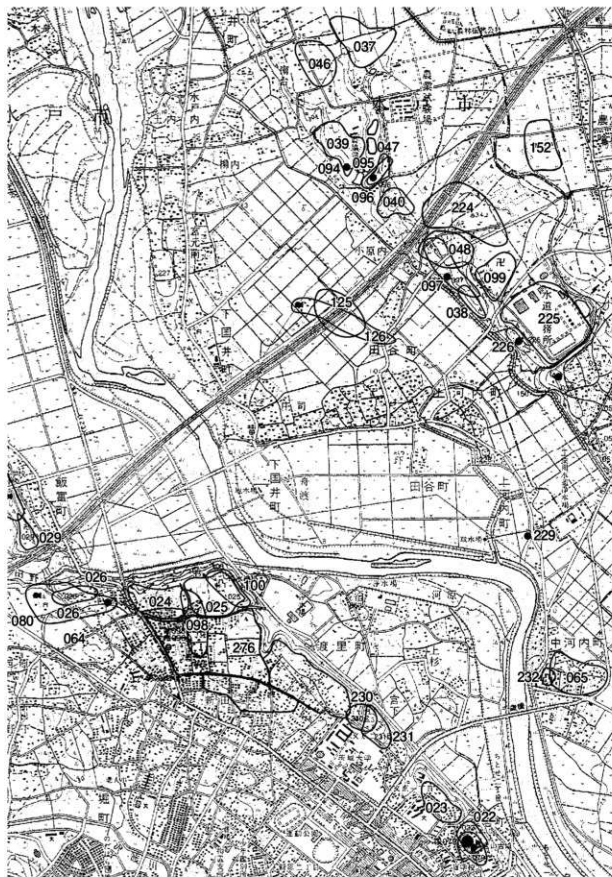
第2地点の調査では、1区において東西方向の区画溝が確認され、覆土から炭化米が出土していることから那賀郡衛正倉院の区画溝とみられる。また、同調査の4区では柱間7尺の掘立柱建物の柱穴も確認されており、正倉院に関連する建物の可能性がある(佐々木・林・市瀬編 2007)。

堀遺跡 (064) では、平成5年に実施された建売住宅の建設に伴う発掘調査の際に、平安時代の竪穴建物跡6棟とともに、3棟の側柱掘立柱建物跡、土坑9基、溝状遺構2条が検出されており、このうち掘立柱建物跡は、3×2間、2×1間、1×1間がそれぞれ1棟ずつ確認された(伊藤 1994)。平成6年に実施された住宅団地造成工事に伴う発掘調査において奈良・平安時代の竪穴建物跡39棟、掘立柱建物跡5棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑1基が検出されている(井上・千葉・櫻村 1995)。竪穴建物跡は8世紀前半が6棟、8世紀後半が15棟、9世紀前半が13棟、9世紀後半が5棟確認されており、土師器、須恵器、鉄製刀子・鎌・雁又鋏・釣針・釘・くり錠などのほかに須恵器壺Gが2点出土している。掘立柱建物跡のうち第5号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性が指摘されている(櫻村 2005)。また、土坑からは人面墨書土器が出土している。

砂川遺跡 (224) からは、昭和55年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴建物跡19棟、竪穴状遺構6基、溝2条、井戸1基が検出されている(渡辺 1981)。竪穴建物跡からは土師器、須恵器とともに鉄製足金具や刀子、雁又鋏、鎌、土製紡錘車などが出土しており、井戸跡からは木製の曲物や櫛、高台付盤など注目される遺物が出土している。

白石遺跡 (225) からは、平成2～3年に水戸浄水場建設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡6棟、基壇1基、溝1条、土坑12基が検出されている(櫻村 1993a)。特に注目されるのは東西2間、南北36間のⅡ区2号建物であり、長さは桁行約88mにもなる。第1号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。溝の時期から8世紀前半に帰属すると考えられている。

白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡 (099) からは、多数の瓦とともに「□里丈部里」、「生マ□里」、「岡田」など台渡里官衙遺跡長者山地区と同様の文字瓦が多数、出土している。小字には「百壇」という礎石建物の基壇との関係が推測される地名が遺されており、3か所の基壇と礎石の存在が報告されている(伊東 1975)。黒澤彰哉氏は本遺跡を新置の河内駅家跡と推定されているが(黒澤 1998)、田谷廃寺跡が河内駅家跡であったとすれば、白石遺跡で確認されたⅡ区2号建物は、櫻村宜行氏の指摘するとおり、駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することも可能であろう(櫻村 1993b)。なお、白石遺跡のⅡ区2号建物を馬房とする見方については本木雅康氏も支持しているが、『延喜式』に記載されている河内駅の駅馬数はわずか2疋である点、養老2(718)年の石城国設置に



第4図 台渡里遺跡群周辺の遺跡分布地図（『茨城県遺跡地図』1/25,000により加筆・修正）

伴い駅馬の数が10位置かれたとしても建物の規模と駅馬数に隔たりがある点に着目し、河内駅のひとつ手前の安俣駅と同様、騎兵がプールされており、そのための馬房と考えるべきではないかという駅の軍事的側面を強調した新見解を提示している（木本 2008）。

台渡里廃寺跡（098）は、高井佛三郎による戦前の学術調査を嚆矢とし（高井 1964）、これを受けて、昭和20年にその一部が茨城県指定史跡とされた。

長者山地区は、従来から炭化米の出土が報告され、礎石建物跡が確認されていることから（高井 1964、瓦吹 1991）、那賀郡衛正倉院と推定された（瓦吹 1991、黒澤 1998）。近年行っている市教委の範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され、正倉院であることが確定的になった（川口・渥美・木本 2009、渥美・川口 2011）。

観音堂山地区は、これまで那賀郡衛政庁院や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹 1991、外山 1993）、市教委が行った範囲確認調査により、寺院建築とみられる礎石建物跡に伴って、陶製相輪の一部や塑像片、須恵器高坏形香炉等の仏教関連遺物が出土したことから、いわゆる郡衛周辺寺院であると推定されるに至った。そしてその創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった（川口・小松崎ほか編 2005）。出土瓦には、「吉（土）田」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志□」、「年足」等寺院造営に関与した那賀郡の郷名や人名が記されたもの、相輪の一部が描かれたものや「佛」銘をもつもの等が豊富に確認されている。

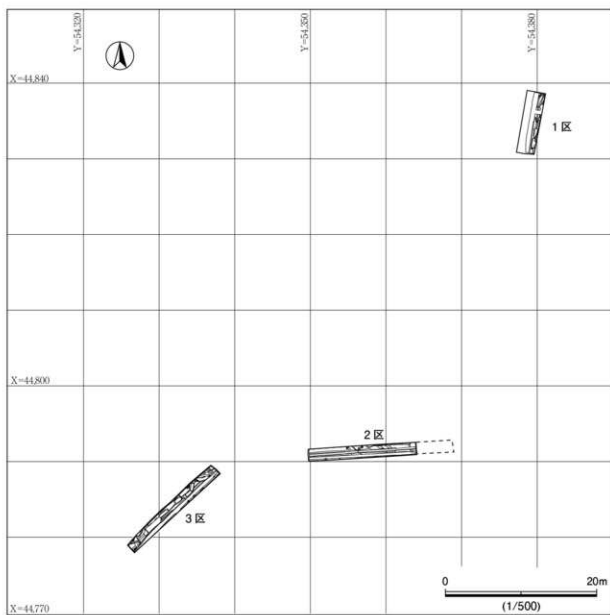
南方地区は、早くから寺院と考えられてきたが（高井 1964、瓦吹 1991、黒澤 1998）、市教委が行った範囲確認調査により、塔跡基壇の内部よりいわゆる内黒土器の坏破片が出土したことから、9世紀後半に造営された寺院跡であることが判明した。観音堂山地区の寺院が9世紀には火災で廃絶していることに加え、南方地区の伽藍区画と思しき溝の掘削が途中で廃絶されていることから、観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが、造営は何らかの事情により中断した可能性が高い（川口・小松崎ほか編 2005）。なお平成17年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

以上のように台渡里官衛遺跡の周辺には古代常陸国那賀郡家と郡衛周辺寺院に深く関わる官衛遺跡と拠点的な集落跡が展開している状況がうかがえる。（米川）

第1表 台波里官衙遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石鏃・土偶、弥生土器(後)、土師器(古)・須恵器(古)	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石剣・土偶、弥生土器(後)、土師器(古前)・須恵器	
24	アラク遺跡	集落跡	矢頭器(先)、縄文土器(早～晩)・石斧・石剣・土偶、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	H1, H18, H21, H22年度調査
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
29	安戸屋遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
37	河川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、土師器(古)、土師器(奈・平)	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)・石鏃・土偶、弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	埴器(先)、縄文土器(前～後)、土器片鏃・石製品、弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後)、弥生土器(後)、土師器(古)、土師器(奈・平)	
63	环渡里遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)	
64	瀬遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古前・奈・平)、須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈良・平安)・鉄鏃・紙石・鉄製品(鏃・鏃・刀子・釘)・瓦、内耳土器(中)、土師器片鏃(中)、常滑焼(中)、鏝り鉢(中)・石臼、瓦質土器(近)、磁器(近)	H5, H6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	古墳(前)・土師器(奈・平)	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	前方後円墳1(2)、円墳1(2)
80	西原古墳群	古墳群	土師器(古)、須恵器・勾玉・碧玉・九玉・紫玉・銅鏃・鉄鏃(古)	前方後円墳1、円墳8(11)
94	権現山古墳群	古墳群	古墳1(2)	円墳1(2)
95	権現山横穴群	横穴群	土師器(古)、須恵器(古)、水晶製切子玉、ガラス製小玉(古)	横穴6(4)？
96	富士山古墳群	古墳群	土師器(古)、円筒埴輪・人物埴輪(古)	前方後円墳1(7)、円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	前方後円墳1、円墳2(4)
98	台波里廃寺跡	寺院跡/官衙跡	ナイフ形石器・男女首飾有種矢頭器・銅片(先)、縄文土器(前～後～晩)・石器、弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、漆器土器(奈・平)・瓦・瓦葺・軒瓦・軒平瓦・髹平瓦・面瓦・隅切り瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金銅製品・鉄製品(釘・鏃)・青銅製品・鉄滓・須口、オウラケ(中)・内耳土器(中)	S13, S16, S17, S18, S45～S47, H6, H19, H12～H22年度調査
99	田谷塚寺跡	寺院跡/官衙跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)・平瓦・丸瓦・軒瓦・軒平瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城跡跡		土塁と堀が良好な状態で遺存
121	渡里町遺跡	城跡跡	縄文土器(早・中・後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈・平)	H15, H16, H20年度調査
125	麻宮遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、弥生土器(後)、土師器(古前・後)	
126	麻宮古墳群	古墳群		前方後円墳0(1)、円墳0(2)、溝溝
231	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦(奈・平)	S55, S56年度調査
225	白石遺跡	城跡跡/集落跡	角鎌状石器(先)、削器(先)、矢頭器(草創)、有舌矢頭器(草創)、石鏃(草創)、縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)、内耳土器(中)・陶器(中)・磁器(中)	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0(1)、溝溝
230	荻原神社古墳	古墳	縄文土器(後)、土師器(古)、陶器(近)	円墳1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
232	中河内祖跡	城跡跡		
276	台波里官衙遺跡	官衙跡/集落跡	縄文土器(晩)、土師器(古・奈・平)、須恵器(古・奈・平)、軒平瓦、平瓦・鉄製刀子(古)、鉄製鏃(古)、紙石(古)、内耳土器(中)、陶器(近)、磁器(近)、銅鏃(近)、銅製鏃(近)、紙石(近)	H6, H8, H15～H22年度調査

(井上・藤沼・仁平・根本 1999)に加筆

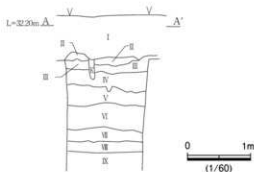


第5図 調査区域図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本堆積土層

今回の調査では、3区のはほぼ中央で基本堆積土層の観察を行った。表土は道路整地に伴う上層部の盛土層（I a層）と旧表土にあたる下層部（I b層）に分けられる。I b層は2区では確認されていない。II層は漸移層と考えられるが、部分的に旧表土が混在し、軽石状の赤色粒子や黄色粒子が少量含まれている。III層のソフトローム上面が遺構確認面となる。IV層以下はハードロームとなるがVI層は色調が暗めである。VII層から、鹿沼軽石と考えられる黄色軽石粒が認められるようになり、下層に移行するに従って、含有率が高くなる。IX層は鹿沼軽石粒を伴い、鹿沼軽石層の上層部と考えられたが、純層までは確認できなかった。



- | | |
|----------------------|--|
| I 表土 | 上層は現地元の盛土層 (a)。下層は旧表土となり、黒地の強い層となる。漸移層。旧表土の混在が一部認められる。赤色・黄色の軽石粒が散見認められる。 |
| II 7.5YR 4/6 褐色土 | ソフトローム層。赤色・黄色の軽石粒散見。ソフトローム層。赤色・黄色の軽石粒散見。 |
| III 10YR 5/6 黄褐色土 | ソフトローム層。赤色・黄色の軽石粒散見。 |
| IV 10YR 5/8 黄褐色土 | ソフトローム層。赤色・黄色の軽石粒散見。 |
| V 10YR 7/6 明黄褐色土 | ハードローム層。赤色・黄色の軽石粒やや増加。黒色粒含まれる。 |
| VI 10YR 4/6 褐色土 | ハードローム層。黄色軽石やや多く含まれる。 |
| VII 2.5YR 6/4 明黄褐色土 | ハードローム層。黄色軽石粒・黒色粒多。 |
| VIII 2.5YR 7/4 明黄褐色土 | 鹿沼軽石混土層 (10%)。 |
| IX 2.5YR 7/8 黄褐色土 | 黄沼軽石混土層 (40%)。 |

第6図 基本堆積土層図

第2節 調査区の概要

今回の調査地点は、広大な台渡里官衙遺跡の南東端部に位置しており、現状の道路に即したトレンチ状の調査区を設定している（第2・5図）。幅の狭い道路であるため、歩行者用通行部分を確保しなければならない事情から、道路中のどちらか一方に、拡張部を含めた範囲で調査区を設定した。調査区内には、いずれも水道管及びガス管がほぼ縦断した形で埋設されていた。

1区は最も北側に位置し、道路中の東側に寄せて南北方向に長い調査区を設定している。全長は8.2m、幅は2.4mで現地表面から遺構確認面までの深さは70cm前後である。調査区西側は1.5～1.7mの幅で、水道管及びガス管が縦断して遺構が壊されていた。

2区は1区から南西方向約45m地点に位置し、道路中の北側に寄せて東西方向に長い調査区を設定している。全長は19.0m、幅は1.6mで、現地表面から遺構確認面までの深さは、最も浅い西端で110cm、最も深い東端では140cmとなる。東側の約5mまでは浸透式排水による掘削によって攪乱を受けており、遺構が確認できたのは、西側14.2mの範囲である。調査区の中央には幅30cmの水道管及びガス管がそれぞれ平行して縦断し、遺構が壊されていた。

3区は1区から西方向約12m地点に位置し、道路中の北西側に寄せて、北東から南西方向に長い調査区を設定している。全長は15.4m、幅は2.1mで、現地表面から遺構確認面までの深さは85cm前後である。調査区東側壁には幅40cm前後の既設管が縦断し、遺構が壊されていた。尚、各区とも狭小な調査区であるため、一部の小規模な土坑以外は全容を把握することができず、ほぼ推測の域を出ないものもあった。

第3節 検出された遺構と遺物

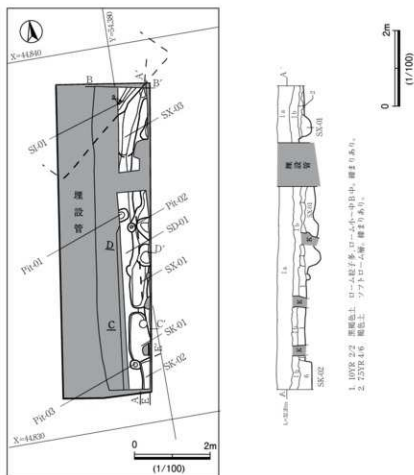
(1) 1区 (第7～9図・写真図版1)

1区で確認された遺構は、竪穴建物跡1棟、土坑2基、ピット3基、溝1条、不明遺構2基である。

竪穴建物跡(SI-01)は、調査区の北端で壁と床面の一部が確認された。壁面は北東から南北方向(N-50°-E)に延びており、形状は方形をしていと考えられる。確認面からの深さは46cmを測り、床面は貼り床により平坦面が構築されている。壁際には幅26cm、深さ10cm程の周溝が確認され、住居内を全周しているものと思われる。

土坑(SK-01～02)は、いずれも調査区の南側で確認されている。SK-01はSD-01と重複しており、覆土の違いから土坑と判断した。平面規模は長軸120cm、短軸50cmの長楕円形で、深さは5cmと非常に浅く、SD-01の覆土と上端の一部をわずかに切り込んでいるに過ぎない。SK-02は、深さ23cmの箱型をした土坑で、SK-01や旧表土を切り込んで構築され、新しい時期のものとして判断される。SK-01の覆土は、SK-02とは類似した覆土を持っており、近い時期のものではないかと推測される。

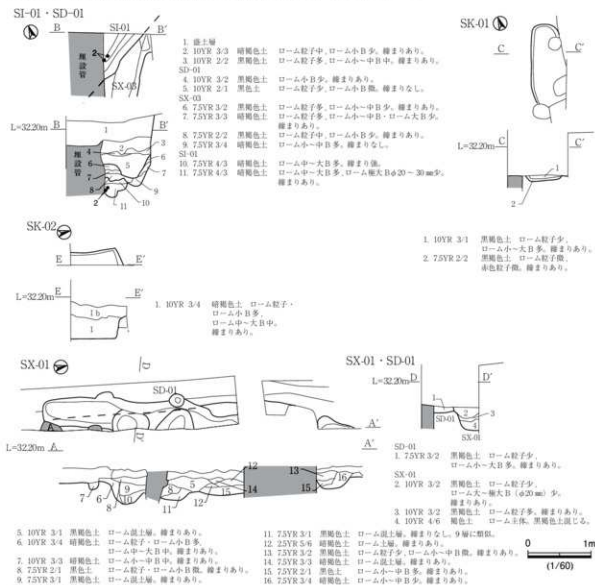
ピット(Pit-01～03)は、規模が径24～30cm、深さ9～36cmの小規模なもので、いずれも溝下から確認されている。それぞれの配置に規則性を見出すことはできなかった。



第7図 1区 全体図

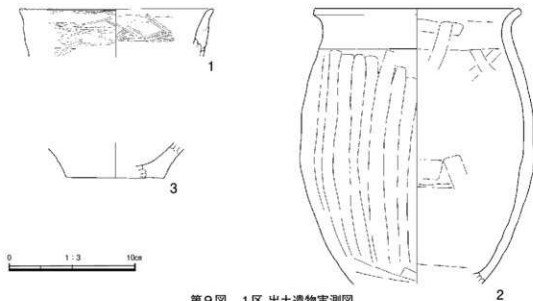
溝 (SD-01) は、既設管にほぼ沿って掘り込まれている。走行方向は現道にほぼ即したN-8°-Eを示している。深さは8cmと浅く、西側に向かって緩やかな傾斜を見せているが、西側半分が既設管敷設により攪乱を受けているため、断面形状は把握されなかった。現状道路の旧境界下に沿っていることから、地境溝であった可能性が考えられる。

不明遺構 (SX-01・03) は、細長い長方形形状の掘り込みで、SX-01はSD-01に切り込まれ、逆にSX-03はSI-01を切り込んでいる。SX-01は底面で凹凸が著しく、土坑が重なり合ったものではないかと考えられるが、覆土にロームと黒褐色土の交層堆積が認められたことから、基壇の一部の可能性も考慮された。しかし、掘り込みが溝状に伸びて広がらないことや覆土の締まりが非常に弱いことから、その可能性は低いものと思われる。規模は、長さ314cm、幅51cm、深さは24~42cm、長軸方向はN-14°-Eを示している。SX-03は長方形形状の掘り込みで溝状に伸び、SX-01とは、規模や長軸方向が類似しているが、覆土が単層であることや底面が安定していることなど異なった点も認められる。規模は長さ196cm、幅56cm、深さは34cm前後、長軸方向はN-16°-Eとなっている。



第8図 1区遺構実測図

1区で出土した遺物は、土師器12点(坏3点、甕9点)、須恵器4点(甕3点、蓋1点)、陶磁器類3点のほか、不明土器2点と鉄釘と思われる破片が1点であり、主にSI-01から出土している。ほかの遺構からは、図示できるものはなかったが、SK-01で土師器甕、須恵器蓋の破片が出土している。陶磁器類や不明の土器はSD-01からの出土資料である。1・2はSI-01からの出土である。1は坏の口縁部片としているが、厚手で甕などの口縁部に類似したつくりとなり、細片のため不安はあるが、鉢形土器の可能性も考えられる。2の土師器甕は、SI-01南東壁際で出土した接合資料である。胴部は丸みを持たず、口縁部は開いて立ち上がった器形となる。3は甕の底部片で、体部下端がやや張り出している。1～3よりうかがわれるSI-01の時期は、2の口縁部形態や長胴化が認められる傾向や、3の底部片では体部下端がやや張り出し気味になっていることなど、7世紀後葉頃の様相が認められる。なお、同一堅穴建物跡からは、細片のみであるが、ミガキが施された常総型甕と思われる胴部片も見受けられる。須恵器蓋の破片も1点含まれているが、本跡に伴うかは不明である。



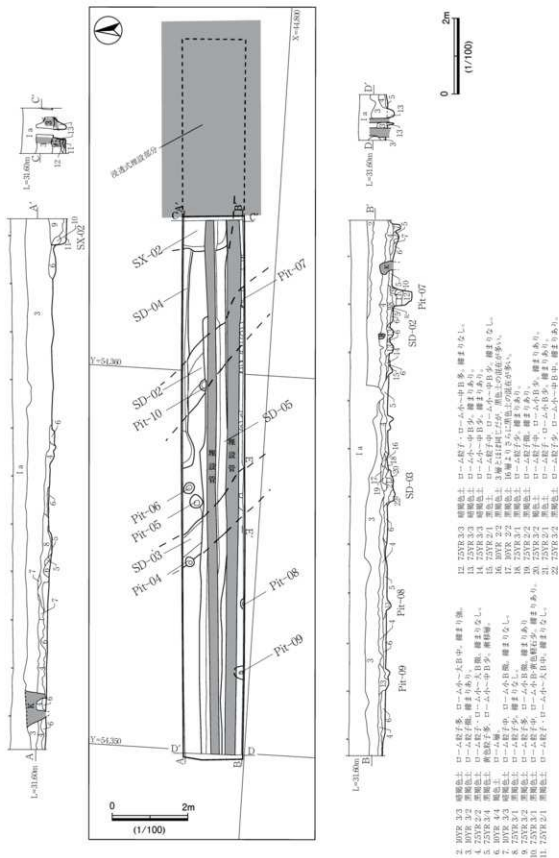
第9図 1区 出土遺物実測図

(2) 2区 (第10～11図・写真図版2)

2区で確認された遺構は、時期不明のピット7基、溝4条、不明遺構1基である。

ピット (Pit-04～10) は、規模が径25～35cm、深さは15～30cm程の小規模なものが主体となる。Pit-04～07・10は、調査区のはほぼ中央から東側寄りのSD-02・03間でまとまる傾向にはあるものの、性格や規則性は見出せない。南側壁にかかるPit-07は、深さが53cmで、他のピットとは形状や規模が異なっており、覆土も暗褐色土が主体となることなどから、古い時期の可能性はあるが、本区や他の調査区では同様のピットは確認されていない。

溝(SD-02～05)は、SD-02-03が幅60～80cm程の浅い溝で、ともに平行して北西～南東に走行している。走行方向はSD-03がN-40°-E、SD-02はN-41°-Eを示し、形状や規模が類似していることから、関連性が指摘される。双方の溝間には若干硬化したような部分が見受けられたため、道跡に伴う側溝の可能性も考えられたが、全体的には硬化部分が明瞭ではなく、路面とする確証は得られなかった。SD-04

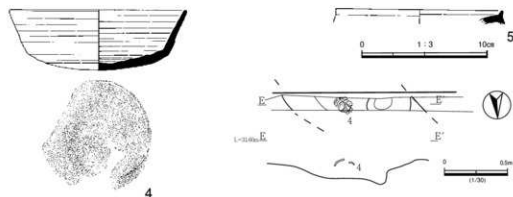


第10図 2区全体図

は北側壁に沿って確認された浅い溝であるが、北側壁の土層断面（第10図A-A'）から、谷地形による落ち込みに伴う可能性がある。SD-05は、埋設管に沿って確認されているもので、道路の旧境界とはほぼ一致して走行しており、地境溝の可能性はある。

不明遺構（SX-02）は、方形をした堅穴状の掘り込みである。覆土の状態や、掘り込みの形態から堅穴建物跡の可能性も考えられるが、調査区外または攪乱によって全容が不明である上に、遺物の出土がほとんど見受けられないため、遺構の性格や時期は把握されなかった。

2区で出土した遺物は、調査区全域の遺構、表採遺物を含めても、わずかに須恵器の破片が2点出土したのみである。4は須恵器無台坏で、SD-03南側壁際の覆土中から出土したものである。底部は丸底で非常に精良な胎土をしていることから、8世紀前葉の所産と考えられる。5は須恵器長頸瓶の口縁部片で、SX-02の上層面の出土である。大きく開く内面には自然軸がかり、口端部は下に突出した部分が認められ、形状から9世紀代に下るものと思われる。



第11図 2区 出土遺物実測図・SD-03遺物出土状況平面図

(3) 3区（第12～15図・写真図版3）

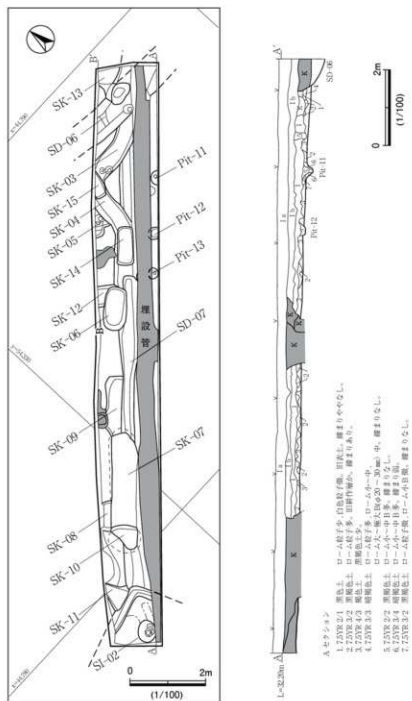
3区で確認された遺構は、堅穴建物跡1棟、土坑13基、ピット3基、溝2条である。

堅穴建物跡（SI-02）は、調査区の南西端に建物跡北東のコーナー部分が確認され、主柱穴も1基確認されている（P-1）。本跡は南西側のほとんどが調査区外にかかるため規模などの全容は把握されないが、確認面からの深さは47cm、主柱穴の規模は長軸60cm、短軸47cmの楕円形で、床面からの深さは56cmとなっている。床面は主柱穴の内側に硬化面が認められ、壁面沿いには周溝が全周するとみられる。周溝の規模は、幅18～21cm、床面からの深さは7cmとなる。確認された部分から判断して、本跡の形態は方形とみられるが、東側の壁から見た主軸方向はN-21°-Wを示している。床の上面では、カマドの構築材と考えられるシルト質土の粘性土が堆積しており、カマド袖部の流れ込みと考えられ、本跡の火処は北側にあるものと推測される。貼り床下の掘り方では、浅い周溝状の掘り込みが確認されており、壁際よりは段差をもって低くなっている（第14図）。

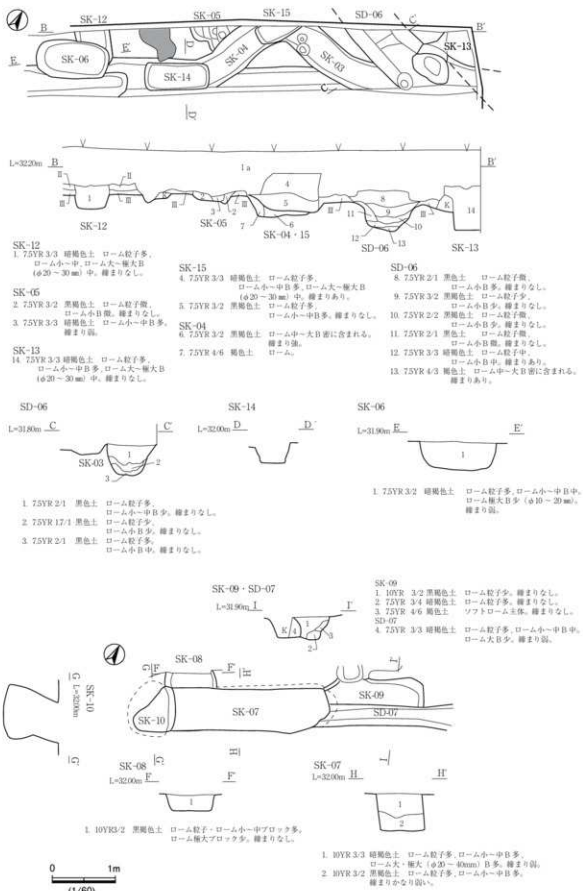
土坑（SK-03～15）は、長方形のものか重複しあっているものが多く、正確な規模などは不明である。いずれもロームブロックを多量に含む類似した覆土で、新旧関係を把握するには困難なものもあるが、SK-07は遺構確認の時点で、重複するSK-08・09やSD-07より新しい掘り込みであることが確認された。

北西側壁にかかる土坑 (SK-05・12・13・15) では、旧表土 (1b層) を切り込んで構築されていることが捉えられ、新しい時期に構築されたものと判断される。SK-03・04は「冎」形に屈曲して連続しており、さらに底面でSK-14・15の重複が確認されている。

ピット (Pit-11~13) は、南東側壁に沿って確認されており、規模が径28~31cm、深さ10~33cmと小規模である。それぞれのピットは列を形成する配置が認められるものの、間隔にはばらつきがあり、関連性はうかがわれない。



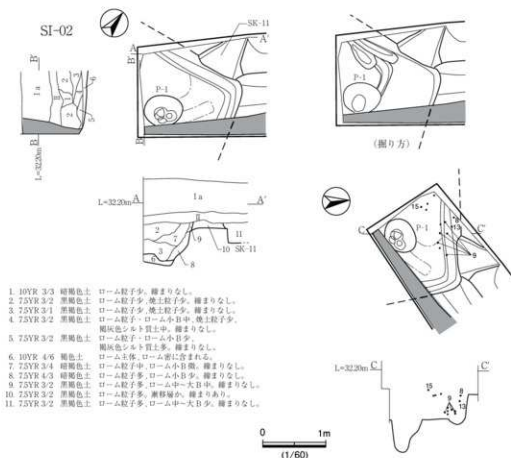
第12図 3区全体図



第13図 3区遺構実測図

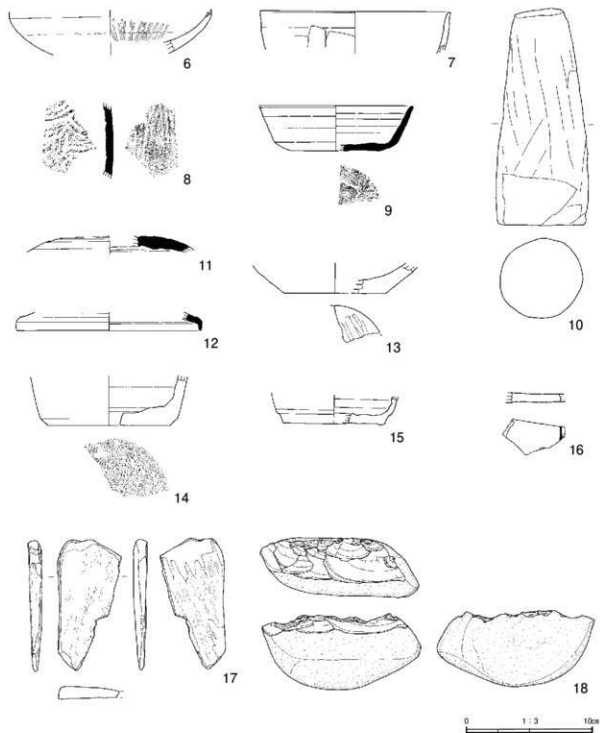
溝 (SD-06) は、調査区の北東端部に確認され、走行方向はN-87°-Wで、ほぼ東西方向に延びているものと推測される。深さは50cmで、断面形状は逆台形状となっており、覆土は黒色土が主体である。遺物は出土していないため時期の判断には不安があるが、今回の調査で確認されている他の溝とは形態や覆土の状態が異なっている。もう一条の溝 (SD-07) は、既設管にほぼ沿って掘り込まれ、走行方向はN-48°-Eを示している。深さは25~30cmで、断面形状はU字状となり、南東側上端部分は既設管敷設により攪乱を受けている。重複する土坑は、SK-07を除いてほぼ全てを切り込んでいる。本跡は、現状道路の旧境界下に沿っていることから、地境溝であった可能性が考えられる。

3区で出土した遺物は、土師器23点 (坏3点、甕20点)、須恵器9点 (坏3点、甕3点、蓋2点、垂類1点)、陶磁器10点、近世の所産と考えられる植木鉢1点、瓦質土器3点に器種不明の土器4点となっている。その他土製品1点、古代瓦1点、石器2点、自然礫4点となっており、出土している遺構はSI-02からのものが最も多い。図示した6~10・12・13・15はSI-02及び同居を壊す攪乱から出土したもので、7世紀後葉から8世紀前葉のものと、8世紀後葉から9世紀代のものまで時期にばらつきがうかがわれるが、後者の時期の遺物は、SI-02を壊している攪乱部分からの出土が主で流れ込みの可能性が高い。6の土師器坏は内面に放射状のミガキが施された浅い器形となり、須恵器甕胴部片8の外平行叩きの技法や精良な胎土などは、7世紀後葉から8世紀前葉の特徴である。一方、須恵器坏9



第14図 3区SI-02遺構実測図及び出土遺物状況図

のヘラ切り離して無調整の底部片や、土師器甕13の胴部下端部の形態などは、8世紀後半以降の様相を示す。遺物の出土状況から瀬戸・美濃系の陶器徳利の底部片15は表土層（1b層）から近い位置の出土である。次いでSK-07からの出土が多いが、前述したように、SK-07は新しい時期のものと判断されている土坑であり、出土遺物の内容を見ると、縄文時代の所産とみられる18の礫器や16の陶器、14の植木鉢片などを含めた新しい時期のものも目立ち、時期的なばらつきが認められる。（高野）



第15図 3区出土遺物実測図

第2表 出土遺物観察表

図版	出土地点	器種	法量 (cm)	部位 遺存率	焼成	色調	胎土	器形・技法の特徴
1	SI-01	土師器・ 環(鉢*)	口径 (15.2) 器高 (3.8)	口縁部	良好	外7.5YR4/2灰黒 内7.5YR5/4にぶい 褐色	長石・石英・ガラス 質粒	内外面ともナデ後、ミガキ・ 輪轆痕が認められる。
2	SI-01	土師器・ 蓋	口径 (16.0) 器高 (21.8)	口縁部～ 胴部片	普通	内外5YR6/6褐色	長石・石英・黒粒多	外面は縦方向のヘラ削り。 内面は上半分が縦方向のヘラ削り、 下半分は横方向のヘラ削り。
3	表採	土師器・ 蓋	器高 (2.8) 底径 (7.6)	底部片	普通	外5YR4/2灰黒 内7.5YR4/2灰黒 色	長石・石英・赤色 スコリア	被熱のためか内外面ともに 器面が荒れている。
4	SD-03	須恵器・ 環	口径 (14.0) 器高 (4.8)	2/3存	良好・ 堅緻	内外2.5YR6/1黄 灰色	石英・チャート微 黒粒中・海綿骨針少	回転轆轤水挽成形。底部は 丸底で、回転ヘラ削り調整。
5	SX-02	須恵器・ 長頸瓶*	口径 (13.2) 器高 (1.1)	口縁部	良好・ 堅緻	外7.5YR3/1暗灰 色 内5Y7/3浅黄色	長石・石英・赤色 スコリア	内面に自然釉がかかる。
6	SI-02	土師器・ 環	器高 (3.5)	体部片	良好	内外5Y5/6明赤褐 色	長石・石英・砂礫 多、黒粒、海綿骨 針極微	外面はヘラナデ調整。輪 轆痕が認められる。 内面は放射状のミガキが 施される。
7	SI-02	土師器・ 環カ	口径 (14.9) 器高 (3.3)	口縁部	良好	外10YR4/2灰黄褐 色 内10YR6/3にぶい 黄褐色	長石・石英・黒粒	外面はヘラ削り後ナデ。 黒色処理が施される。
8	SI-02	須恵器・ 蓋	器高 (6.0)	胴部片	良好・ 堅緻	外5Y6/2灰オリー ブ色 内2.5Y6/2灰黄色	長石・石英	外面は平行叩き。内面は 同心円状当て具痕。
9	SI-02	須恵器・ 環	口径 (11.0) 器高 (3.6)	1/4存	良好	内外2.5Y6/2灰黄 色	長石多・石英、赤粒、 黒粒	回転轆轤成形。底面は 回転ヘラ削り。体部下 部は二次底部。器面は 荒れている。
10	SI-02	土製品・ 支脚	器高 17.2 幅 39～68 重さ (738.9)	ほぼ完形	—	5Y6/6褐色	砂粒多	被熱。外面ヘラ削り。
11	SD-01	須恵器・ 蓋	器高 (1.4)	天井部	良好・ 堅緻	内外2.5Y5/1灰色	長石・石英・黒粒 微、チャート極微	天井部は回転ヘラ削り 調整。換み部欠損。
12	SI-02	須恵器・ 蓋	口径 (14.5) 器高 (1.1)	口縁部	良好・ 堅緻	外5YR6/2灰オリー ブ色 内5YR6/1灰色	長石微、石英微、 黒粒微	回転轆轤成形。端部が 垂下する。
13	SI-02	土師器・ 蓋	器高 (2.4) 底径 (8.0)	底部片	普通	外5Y5/4にぶい赤 褐色 内10YR6/3にぶい 黄褐色	長石・石英多	底面は棒状工具を用いた 一定方向のミガキが 認められる。外面は器 面が荒れている。
14	SK-07	榑木鉢・ 底部	器高 (4.0) 底径 (9.6) 孔径 (1.8～2.2)	底部片	良好	内外7.5YR2/1黒 色	石英・砂礫・白粒多	底面は回転糸切り痕。 中央に穿孔あり。
15	SI-02	陶器・ 徳利*	器高 (2.3) 底径 (8.0)	底部片	良好・ 堅緻	外5Y7/2灰色 内2.5Y7/3浅黄色	石英・黒色粒微	瀬戸・美濃系。底部は 回転ヘラ削りで、削り 出し高台を作り出す。 外面は釉がかかる。
16	SK-07	陶器・ 皿	—	底部片	良好・ 堅緻	内外2.5Y7/3浅黄 色	石英・白色粒極微、 黒粒	底面は回転ヘラ削り。 内面は鉄線が施さ れる。
17	SI-02 P-1	石器・ 砥石	長さ (10.3) 幅 (5.1) 厚さ (1.0) 重さ (630g)	—	—	—	—	安山岩製か。良く使 い込まれ、擦り面中 央部がくぼむ。
18	SK-07	礫器	長さ (6.0) 幅 12.4 厚さ 4.9 重さ (422g)	—	—	—	—	砂岩製。

第3表 出土遺物一覧表

出土地点	出土遺物		縄文	弥生		古墳			奈良・平安			中世			近世			近現代			不明	総計								
区	遺構名	種別		器種	産地	破片	割体	小計	破片	割体	小計	破片	割体	小計	破片	割体	小計	破片	割体	小計			破片	割体	小計					
1IX	SI-01	土師器	坏			0		0	3	3			0		0		0		0		0		0	3						
		土師器	婁	常総型			0		0	6	6			0		0		0		0		0		0	6					
		須惠器	蓋				0		0		0	1	1		0		0		0		0		0		0	1				
		鉄製品	釘				0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0	1	1	1				
	SK-01	土師器	婁	常総型*			0		0	2	2			0		0		0		0		0		0	0	2				
		須惠器	蓋				0		0		0	3	3		0		0		0		0		0		0	3				
		土師器	不明				0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0	2	2	2				
	SD-01	陶器	不明	肥前系			0		0	0	0			0		0		0		0		0		0	1	1	1			
			不明	瀬・美			0		0	0	0			0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		磁器	小坏				0		0	0	0			0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		表採	土師器	婁			0		0	1	1			0		0		0		0		0		0		0	1			
	2IX	SX-01	須惠器	長頸瓶			0		0	0	1	1			0		0		0		0		0		0	1				
		SD-03	須惠器	坏			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0	1				
	3IX	SI-02 (覆土)	土師器	坏			0		0	1	1			0		0		0		0		0		0		0	1			
			土師器	婁			0		0	4	4			0		0		0		0		0		0		0	4			
			須惠器	坏			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1		
須惠器			婁			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
陶器			德利*			0		0	0	0	0	0		0	1	1		0		0		0		0		0	1			
土製品			支脚			0		0	1	1	0	0		0	0	0		0		0		0		0		0	1			
SI-02 (Pt-01)		石器	砥石			0		0	0	0	0			0		0		0		0		0		1	1	1				
		礫	不明			0		0	0	0	0			0		0		0		0		0		1	1	1				
		土師器	坏			0		0	1	1	0	0		0		0		0		0		0		0		0	1			
SI-02 (覆乱)		土師器	婁			0		0	12	12			0		0		0		0		0		0		0	12				
		須惠器	婁			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
		須惠器	壺類			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
		須惠器	婁類			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		陶器	不明			0		0	0	0	0			0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		磁器	瓶			0		0	0	0	0			0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		礫	安山岩			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		SK-05	須惠器	蓋*			0		0	0	1	1			0		0		0		0		0		0		0	1		
土師器			坏*			0		0	1	1	0	0		0		0		0		0		0		0		0	1			
SK-07		土師器	婁			0		0	4	4	0	0		0		0		0		0		0		0		0	4			
		須惠器	坏			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
		須惠器	婁			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
		陶器	皿			0		0	0	0	0	0		0	1	1		0		0		0		0		0	1			
		磁器	碗*	肥前系			0		0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		磁器	小坏			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		土器	植木鉢			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1			
		瓦質土器	不明			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	3	3	3			
		瓦	不明			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0	0	0	1			
		不明	不明			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	2	2	2			
		SD-06	石器	礫器		1	1			0	0	0	0		0		0		0		0		0		0		0	1		
須惠器			坏			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
SD-07		須惠器	蓋			0		0	0	0	1	1		0		0		0		0		0		0		0	1			
	陶器	婁	常滑*			0		0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1				
	土器	不明			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1				
	礫	安山岩			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1				
	礫	砂岩			0		0	0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1				
	表採	陶器	皿			0		0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1				
表採	陶器	小瓶			0		0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1					
	不明	不明			0		0	0	0	0		0		0		0		0		0		0	1	1	1					
合計					1	0	1	0	0	0	0	36	0	36	15	1	16	0	0	0	2	0	0	2	0	0	26	1	27	82

第IV章 総括

第1節 土地利用の展開

台渡里官衙遺跡では、これまで78次にわたる発掘調査や試掘・確認調査が蓄積され、報告書等で各時期にわたる遺構の所在が明らかとなっている。第60次となった今回の調査地点では、竪穴建物跡2棟、土坑15基、ピット13基、溝7条、不明遺構3基が確認された。面積的には非常に狭小であったが、北端から南西端までの約100mの範囲に3本のトレンチを入れたに等しく、遺跡の範囲をある程度捉えられる結果となった。ここでは、60次地点を含めた台渡里官衙遺跡の南前原地区の様相をあらためて把握してゆきたい。

(1) 台渡里官衙遺跡南前原地区の様相

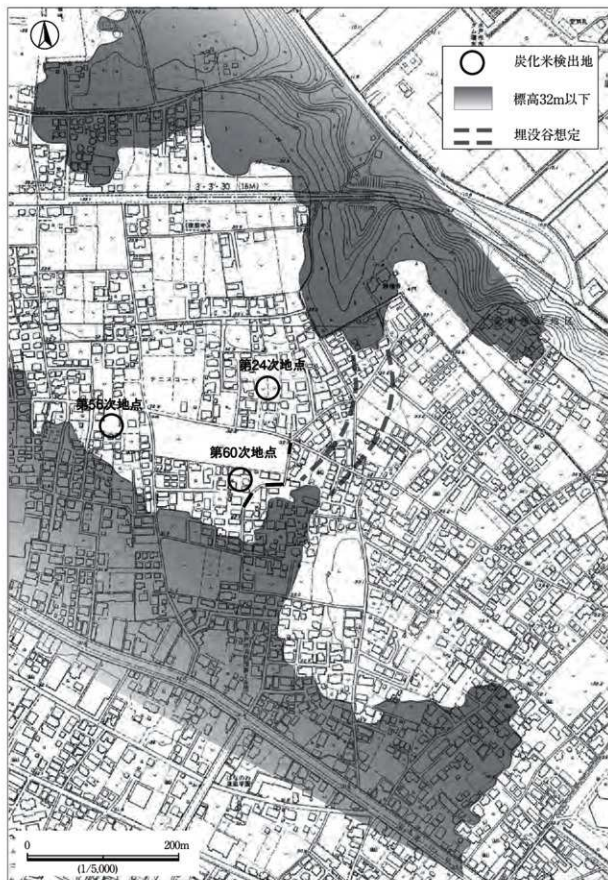
台渡里官衙遺跡から北側に隣接する渡里町遺跡、北西に位置する堀遺跡を含めて現況の地形を注意して観察すると、一見平坦に見える地形が微妙な高低差を有していることがうかがわれる。本次調査地点の中央部分に位置する2区は、他の調査区に比べ若干低い地形をしていることが捉えられた。地形図と現況の高低差を照らし合わせてみると、平均的に標高32～33mの地形の中にあつて、標高32m以下の地点が存在し、台渡里官衙遺跡の南東から南側にかけても広がりを見せている(第16図)。

かつて渡里町遺跡第7地点の調査において、勝輪寺西側にある切通し状の地形から、その南方にかけて、縄文時代早期から中期の遺物を伴った埋没谷の所在が明らかになっており、調査で確認された埋没谷と地形図の標高32m以下の地点がほぼ一致していることが読み取れた(高野・渥美 2009)。今回調査を行った2区でも、遺構確認面が西側から東側にかけて傾斜をもった谷地形の面が検出されており、東側に隣接した第31次調査地点の調査では、160～180cm下でローム面に達する状況(川口・色川ほか 2009)からも、渡里町遺跡で確認された埋没谷が、台渡里遺跡の東方にまで延びてきていることが予想される。

縄文時代に形成された埋没谷は、9世紀代にはほぼ現況に近い地形であったと予想されるが、それ以前には地形的な制約を受けていた可能性が高く、今回の調査によって検出された各遺構は、集落の東縁に位置したものとみられる。

(2) 古墳時代から奈良・平安時代の様相について

8世紀以前の遺構は検出された竪穴建物跡が相当する。1区北端のSI-01で出土した土師器甕(第9図-2・3)をみると、胴部が長胴化する傾向や、張り出し気味の底部などから、7世紀後葉頃の所産と考えられる。3区南西端のSI-02では、浅い器形で径が大きめで内面に放射状の暗文を有した土師器杯(第15図-6)や、内面に同心円文を残した須恵器甕の胴部片(第15図-8)などは7世紀後葉から8世紀前葉の範疇にあるものと思われる。わずかな出土量の遺物から捉えることは不安が残るが、近接する8世紀前葉を初期段階とした第24次の調査事例(小川・大淵ほか 2006)等と比較して、本次調査地点の住居跡はやや先行する時期の様相がうかがわれる。また、第39次調査(佐々木・林編



第16図 台渡里官衙遺跡における炭化米検出地点と旧地形概念図

2008)で溝から出土した放射状暗文をもつ土器と、SI-02の土師器杯(第15図-6)との関連性も注意される。

8世紀代前葉以降の竪穴建物跡は検出されていないが、SD-03の覆土中から8世紀前葉の須恵器杯が出土している。この溝はSD-02と平行して走る浅い溝で、遺跡とも考えられたが、硬化面等が確認されないため、明確ではない。前述したSI-02の覆土上層や同遺構を壊している擾乱中からも8世紀中葉以降の須恵器片(第15図-9・11・12)などが出土しており、周辺域で主体を成している集落の時期と重なるため、同時期の竪穴建物跡などが点在する可能性を示唆している。2区の竪穴状遺構SX-02覆土中から出土した、須恵器の長頸瓶口縁部とみられる破片(第11図-5)は、口唇部下端が突出する形状で、9世紀代に下るものと考えられるが、1点のみの細片から同時期を語るのは困難である。

3区北東端でほぼ東西に走行するSD-06は、覆土の状態から明らかに奈良・平安時代の所産と思われる、掘立柱建物跡を取り巻く正倉院遺構に関連した区画溝の可能性も考えられたが、炭化米が出土した24次調査の溝と比べて小規模であることや、遺物がまったく出土していないことから確証が得られなかった。

なお、今回の調査で関連された遺構は検出されていないが、3区に隣接する住宅において、改築する際に「焼き米」いわゆる炭化米が出たという情報が得られている(第16図)。炭化米については、先にも述べた第24次では正倉院の区画溝からの出土が報告されており(小川・大淵ほか 2006)、さらに個人住宅建築に伴い2009年に実施された第56次(第16図)でも炭化米と掘込総地業による礎石建物跡1棟が確認されている(水戸市教育委員会御教示)。また、古くは豊崎卓氏が提示された那賀郡衙要図にも当地区に倉庫址(焼初出土)の記載がみられる(豊崎 1970)。この地域に炭化米が集中していることは、那賀郡衙に関わる正倉院が広がっていることを示しており、その範囲を知る上で、このような新たな情報には注意が必要であろう。

(3) 中世以降

本次調査の1～3区全体で、中世の遺構及び遺物は検出されていない。

近世以降では、1区内のSD-01や3区内のSK-07、SD-07から近世以降の所産となる陶磁器類が出土している(第15図-14～16)。特に3区内での出土が目立ち、擾乱部分などで竪穴建物跡の上層面からも出土している状況である。SD-01やSD-07は、市道の旧境界線と一致していることから、地溝溝の可能性が高いものとみられ、他の遺構を切り込んでいるため、近世以降といってもかなり時期が新しいものではないかと推測される。その中でSK-07は、確認状況からSD-07より新しい遺構であることが判断されているため、さらに新しい時期に掘り込まれた、イモ穴状の遺構と捉えられる。3区には、SD-07に沿うようにして、SK-07と同様の長方形をした遺構が多く検出されており(第12図・SK-03～15)、人為的な掘削の影響が1・2区より多い地点と見受けられる。なお、最も新しい時期としたSK-07以外の長方形の土坑(SK-03～06・08～15)は、同遺構と比較して小規模なものばかりとなり、時期差に関連している可能性が考えられる。

(高野・米川)

【引用・参考文献】

- 渥美賢吾・川口武彦 2011 『台渡里3—平成19～21年度長者山地区範囲確認調査概報—』第37集 水戸市教育委員会
- 伊東重敏 1975 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代産業の研究(その2) 水戸市田谷
庵寺跡出土古瓦雑考』常陸考古学研究所
- 伊藤廉倫 1994 『茨城県水戸市堀道跡—住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1990 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査
報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里庵寺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市
台渡里庵寺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司・櫻村宣行 1995 『水戸市堀道跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
水戸市堀道跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里遺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育
委員会・空間計画工房
- 井上義安・沼引香未由・仁平妙子・根本睦子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育
委員会
- 茨城県教育委員会 2001 『茨城県遺跡地図』
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・松谷晩子 2006 『台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
第5集 水戸市教育委員会
- 櫻村宣行 1993a 『(仮称)水戸浄水場子定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡』財団法人 茨城県教育財団
1993b 『白石遺跡で検出された遺構について』研究ノート 2号 財団法人 茨城県教育財団
2005 『堀道跡』『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡
を中心として—』茨城県考古学協会
- 川口武彦 2009 『常陸国那賀郡周辺寺院補修期の様相—台渡里庵寺跡観音堂山地区出土の常陸国分寺系軒瓦の諸問
題—』『国士館考古学』第5号 国士館大学考古学会
- 川口武彦・渥美賢吾 2003 『木葉下窟跡群における産業生産の展開(1)—一堂の内茅場・細入両窟跡を中心として—』
『茨城県考古学協会』第15号 茨城県考古学協会
- 川口武彦・渥美賢吾 2004 『木葉下窟跡群における産業生産の展開(2)—細田・打越・四又入窟跡を中心として—』
『茨城県考古学協会』第16号 茨城県考古学協会
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里庵寺跡—範囲確認調査報告書—』第1集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・渥美賢吾・木本挙周 2009 『台渡里1—平成18年度長者山地区範囲確認調査概報』第21集 水戸市教育委員
会
- 川口武彦・色川順子・渥美賢吾 2011 『台渡里4—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第64次)—』
第38集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子・関口慶久・新垣清貴 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』第22集 水戸市教育委
員会
- 瓦吹 堅 1991 『水戸市台渡里庵寺堂書Ⅲ—観音堂山・南方・長者山地区の性格について—』『婆良岐考古』第13号
婆良岐考古同人会

- 木本雅康 2008 「遺跡からみた古代の駅家」山川出版社
- 黒澤彰哉 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』第25号 茨城県立歴史館
- 佐々木藤雄・林 邦夫・水瀬俊一編 2007 「アラヤ遺跡（第2地点）—市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」第12集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林 邦夫編 2008 「台渡里遺跡（第39次調査）—公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」第15集 水戸市教育委員会
- 佐々木義樹 1995 「木葉下窟跡群産杯A1の変化について—消費地における形態と調整技法の様相—」『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古同人会
- 1997 「木葉下窟跡群の須恵器生産—奈良時代前半を中心に—」『婆良岐考古』第19号 婆良岐考古同人会
- 高井悌三郎 1964 「常陸台渡庵寺跡・下総結城八幡瓦窟跡」茨城県教育委員会・綜藝舎
- 高野浩之・瀧美賢吾 2009 「渡里町遺跡（第7地点）—市道常磐23、31、307号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第29集 水戸市教育委員会
- 藤沼香未由・川口武彦・小松崎博一編 2004 「台渡里庵寺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 外山泰久 1993 「アラヤ前遺構（水戸市渡里町）をめぐって」『常総の歴史』13 岩書房
- 豊崎 卓 1970 「第三章 那珂郡家」『東洋史上より見た常陸国府・郡家の研究』山川出版社
- 土生朗治・川口武彦・新垣清貴 2005 「台渡里庵寺跡—市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）—」第2集 水戸市教育委員会
- 渡辺俊夫 1981 「第5章 砂川遺跡」『（茨城県教育財団文化財調査報告第XVI）常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 宮部遺跡・鹿の子A遺跡・砂川遺跡』財団法人 茨城県教育財団

写真図版



1区全景 (北から)



1区土層断面 (北西から)



S-01土層断面 (南から)



S-01 遺物出土状況 (北から)



S-01全景 (北から)



Pit-01・02 全景 (西から)



SK-02・Pit-03 全景 (西から)



2区全景 (東から)



2区全景 (西から)



SD-02 全景 (南東から)



SD-03・Pit-04～06 (南から)



SD-03 遺物出土状況 (北西から)



SX-01 全景 (南から)



3区全景 (北東から)



3区全景 (南西から)



SI-02 遺物出土状況 (南西から)



SI-02 全景 (南から)



SD-01 全景 (東から)



SK-06・12 全景 (南東から)



報 告 書 抄 録

ふりがな	だい わたり ご							
書名	台 渡 里 5							
副書名	市道常磐123号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第60次）							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	高野浩之・米川暢敬							
編集機関	㈱地域文化財研究所／〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 電話：0476-42-7820							
発行機関	水戸市教育委員会／〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 電話：029-224-1111							
発行年月日	2011(平成23)年1月21日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
だいわたりのせき 台渡里官街遺跡	いばらきけん みとし、 わたり 茨城県水戸市渡里 ちょう ほんち ほか 町2616-1番地外	201	276	36° 24′ 07″	140° 26′ 21″	2010.04.06 ～ 2010.04.21	88㎡	道路拡幅・ 下水道工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
台渡里官街遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴建物 2棟	土師器（坏・甕）		今回調査では古墳時代の竪穴建物跡2棟を確認した。奈良・平安時代では、ほぼ東西に走行する溝も確認。		
	集落跡	奈良・平安時代	溝 1条	須恵器（坏・甕・蓋・長頸瓶・瓶類）、瓦				
	—	—	—	陶器（皿・徳利）				
	—	時期不明	土坑 ピット 不明遺構	15基 13基 2基	陶器（碗・皿）、磁器（小坏・小碗）、瓦質土器			

水戸市埋蔵文化財調査報告書一覧

No.	書名	副書名	発行年月
第1集	台波里庵寺跡	一 範囲確認調査報告書一	2005年3月発行
第2集	台波里庵寺跡	一 市道常警17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡	一 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2005年8月発行
第4集	台波里庵寺跡	一 市道常警17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)一	2006年3月発行
第5集	台波里遺跡	一 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ	一 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第3次調査報告書一	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点)	一 市道浜田207号線無誘新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第8集	環遺跡(第3地点)	一 ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第9集	環遺跡(第4地点)	一 プラントンコースⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ	一 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書一	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書		2007年3月発行
第12集	アラマ遺跡(第2地点)	一 市道常警10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点)	一 住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点)	一 介護老人福祉施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年3月発行
第15集	台波里遺跡(第39次)	一 公共下水道管埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年3月発行
第16集	波里町遺跡(第5地点)	一 市道常警31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年6月発行
第17集	波里町遺跡(第6地点)	一 市道常警34.275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年6月発行
第18集	薄内遺跡(第1地点)	一 移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年8月発行
第19集	堀遺跡(第9地点)	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年9月発行
第20集	元石川大谷原遺跡	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年12月発行
第21集	台波里Ⅰ	一 平成18年度長者山地区範囲確認調査概報一	2009年3月発行
第22集	平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書		2009年3月発行
第23集	吉田古墳Ⅲ	一 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第4・5次発掘調査報告書一	2009年3月発行
第24集	町付遺跡(第1地点)	一 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年3月発行
第25集	東組遺跡(第1地点)	一 物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年3月発行
第26集	荷鞍坂遺跡(第1地点)	一 コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年3月発行
第27集	大鋸町遺跡(第8地点)	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年3月発行
第28集	雁沢遺跡(第1地点)	一 工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年3月発行
第29集	波里町遺跡(第7地点)	一 市道常警23, 31, 307号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年6月発行
第30集	台波里Ⅱ	一 市道常警283号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台波里第51次)一	2009年6月発行
第31集	若林遺跡(第1地点)	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年8月発行
第32集	堀遺跡(第16地点)	一 市道波里48号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一	2009年10月発行
第33集	堀遺跡(第18地点)	一 市道波里31, 41号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年11月発行
第34集	堀遺跡(第17地点)	一 市道波里35号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2009年12月発行
第35集	平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書		2010年3月発行
第36集	笠原水道	一 第6次・10次・11次発掘調査報告書一	2010年3月発行
第37集	台波里Ⅲ	一 平成19~21年度長者山地区範囲確認調査概報一	2011年1月発行
第38集	台波里Ⅳ	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台波里第64次)一	2011年1月発行
第39集	堀遺跡(第3地点第2次調査)	一 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2011年1月発行
第40集	台波里Ⅴ	一 市道常警23号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台波里第60次)一	2011年1月発行
――	水戸城跡	一 三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書一	2006年9月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第40集

台渡里5

—市道常磐123号線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里60次）—

印刷 平成23年1月21日

発行 平成23年1月21日

編集 株式会社地域文化財研究所

〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9

TEL：0476-42-7820 FAX：0476-42-3804

発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市中央1丁目4番1号

TEL：029-224-1111（代）

印刷 株式会社ライフ

〒286-0134 成田市東和田595

TEL：0476-24-1564